
アプリコット

風は碧海は蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アプリコット

【Nコード】

N2536N

【作者名】

風は碧海は蒼

【あらすじ】

どうしてこんなことになっちゃたんだろう。

映画配給会社に勤めている私、三橋弥生、今回の仕事は通訳兼ツアーコンダ。彼はジョン・ナービスという34才の実力俳優。滞在中だけの愛人になったって、ポイ捨てのティッシュみたいになるだけ。とにかく手が速そうだから気をつけてと周りのみんなに脅かされている私はびくびくだ。

出違い

どうしてこんなことになっちゃたんだろう。

映画配給会社に勤めて、主に事務担当の仕事をしていたが、忙しい時やイベントの時には表立ったことも手伝うこともある。

今回の仕事はまったくの想定外だ。

多少の英会話くらいなら話すこともできるけど、主演俳優の通訳をやることになるなんて思っても見なかった。

その月は、なんだか忙しい月で、外国の映画祭もあったことから、営業担当の棚橋さんは買い付けに出ていて不在。他の語学堪能な営業も、来日の重なった映画の俳優に付き添っている。

「棚橋が帰ってくるまでの5日間だけお願い！」

と社長に拝み倒され、しょうがなくやらなければいけなくなった。

と、いつても本格的なPR活動は1週間後から。その映画俳優が予定より早く来日して、観光をして回るから、その付き添い、ツアーガイドみたいなものだ。

勝手に早く来て観光するなら、自分で勝手に回れよと思うのだが、まったく日本語がわからないから通訳のできる人がほしいと連絡があったそうだ。

彼はジョン・ナービスという34才の実力派俳優だ。主演映画は少ないかもしれないが、重要な脇役として有名な映画にも出演していたし、今回は彼の主演映画のPRに日本に来たのだ。

ハリウッド俳優なんて、きつとわがままで高飛車なんだろうなと出会う前からちよっとうんざりしていた。

空港の出口ゲートで待っていると、ひときわ背の高い彼がこちらへ向かって歩いてくる。ほんとに一人で来たんだ。マネージャーもお付きの人もいないようだ。もちろん彼女も連れていない。

「ハロー。ミスターナービス。私ムービーエキサイティングの三橋

弥生と申します。よろしく」

と英語で言っと、

「こんにちは。よろしく」

と挨拶を返した。

「荷物はこちらですか。お持ちしましょうか？」

「いいえ。大丈夫」

一応マネージャーや付き人としてではなく、対等な人間として扱ってはくれそうだと安心したら

「君一人？」

と聞かれた。ご不満なのか？付き人何人もはべらかせてるセレブじゃないんだから。

「そうです。ミスター。うちの会社も手一杯でして、私一人だけで対応させていただきますので、ご不満な点もありでしょうけど、どうぞお許してください」

「OK。問題ないよ」

意外にちゃんとした人かもしれないな。そんなに高飛車な感じもしないし、わがままそうでもないし。

「ホテルに直行します。社長がご挨拶したいと、ホテルで待っています」

「わかった」

タクシーでホテルへ向かう。行きは私一人だったので電車で行ったが、彼を電車で移動させるわけにはいかないだろう。基本的に明日からの観光は彼の実費だ。私の分は会社から出る。こういう移動はタクシーを使うことも多いだろうし、タクシー代は余分に持たされている。

湾外沿いの海に見えるホテルを予約した。

この後、何泊ここに宿泊するのか、どのあたりを観光するのかまったくわからない。

社長と話をした後、予定を組むことになるだろう。このホテルには旅行代理店も入っているし、航空券や新幹線を使っなら予約するこ

とも可能だ。

ホテルに着くと、ロビーで社長が手を振って待っていた。

「ハロー、ミスターナービス。ムービーエキサイティングの加賀美です」

うちのやり手の女社長だ。彼女の豪腕には驚かされるが、その統率力と決断力に惚れてこの会社で仕事している人も多い。こんな小さな映画配給会社でやっていけるのもこの加賀美社長だからだ。若い頃にハリウッドの映画製作会社で仕事をしていたらしく、その時のつても大いに役立っている。

そのままロビーの喫茶店へ移動する。

「あなたの担当する棚橋がフランスの映画祭に行ってるので、その間彼女、三橋に任せますから好きに使ってください。と言っても、ラバー（愛人）という意味ではなくてね」

困る困る。そんなことになったら大変だ。本気になったって、バカを見るだけ。滞在中だけの愛人になったって、ポイ捨てのティッシュみたいになるだけ。そういうことは避けなければ。

「観光はどちらへ行きたいと思ってるの？」

「京都、鎌倉、浅草・・・かな？」

「OK。それなら浅草は明日行けばいいじゃない？夜は横浜へ移動する？あさって鎌倉を見て回ればいいし。」

あと残り3日間で京都へ小旅行かしらね？」

「そうですね」

「横浜は私がホテルを取っておくわ。コンチネンタルで」

「わかりました」

と私は答えた。

「京都へは飛行機がいいかしら？新幹線？」

社長がひとり言のようにつぶやくと

「新幹線で何時間ですか？」

と彼がきいた。

「3時間かな？」

「じゃあ新幹線で」

彼は納得したように言った。

「じゃ、三橋さん、京都までの新幹線とホテルの予約よろしく」

社長が私に言う

「じゃあこれを」

と彼がブラックカードを出した。

「いいわ。これは私がプレゼントするわ。向こうに行ってからはよろしくね」

と加賀美社長は言っ、彼にウィンクした。

「ありがとうございます。心から感謝します」

加賀美社長からカードを預かると、私は席を立て下階の旅行代理店に行った。

喫茶店に戻ると社長が一人で待っていた。

彼は先に部屋に行ってもらったそう

「私はもう失礼するわ」

「え？夕食は付き合っただけなんですか？」

「あとは弥生ちゃんに任せるわ」

「ええー。苦手なんですけど」

「割り切って食われちゃうとかどーお？」

「やめてください！」

「上のラウンジで食事に付き合ったら今日はもういいわよ」

「明日またホテルに迎えに来るということ」

「そうね」

社長はそう答えながら、うすら笑いをこらえない。

「ふふふ。そんな悪い男には見えなかったわよ。いたってジェントルマン」

「そうですねー」

「大事なお客さんだから、あんまり邪険にしないでね」
「社長ー」

とにかく手が速そうだから気をつけてと周りのみんなに脅かされている私はびくびくだ。

「じゃ、がんばってね。困ったことがあったら電話して」
さっそうと社長は帰っていく。ため息が出るのは私だ。

まだ夕方5時だから、夕食には早すぎるかな？かといって、帰ってまた来るというのもバカみたいだし。

とりあえず彼に聞いてみよう。

コンコンとノックして

「ミスターナービス。おられますか？」

ガチャと開いたドアには、白いパイル地のガウンを着て、濡れた髪をぐしぐしとタオルで拭きながら彼が出てきた。

「あつ、ごめんなさい。シャワー中でしたか？」

「いいえ。どうぞ」

そういつてドアを開けたまま、奥に入ってしまうので、入らざるを得ない。

「え！あの、あの、ミスター」

赤いパトランプが頭の中で警戒音を鳴らしながら回っていた。

「ジョンでいいよ」

奥のソファに座って彼が言う。

「あの、ミスター」

「ジョン」

「あの、ジョン」

「うん」

なんと言っていていいか困って固まっている私を見て、

「座って」

と優しく微笑んだ。

「襲ったりしないから大丈夫」

私の思っていることを当てられてドキッとする。

「夕食まで時間があるから、京都でどこへ行くか相談しようよ」

「OK」

ちよつと安心して、落ち着いてきた。

「弥生」

「え!？」

急に名前を呼ばれてびっくりする。

「お互い様でしょ?」

ジョンと名前で呼んだら、弥生と名前で呼ばれる。そうなんだけど、ちよつとドキッとするなあ。

空港からホテルまでのタクシーの中では

「ミスターナービス」

「ミス三橋」

と呼んでいたし、わりと無表情だったから、急に名前で呼ばれたり、微笑まれたりするとドキドキするよ。

こうやってみんな虜になっちゃうんだろっなー。反則技だ。

「何才なの?」

「27才です」

「恋人は?」

「い、いないです」

「そう」

やばいなあ。こうやって落としちゃうんだろっなー。

キス

本屋に行つて観光ガイドブックを買いに行くことになり、先にロビーに下りた。

「着替えるから待つて」

と言つて、ガウンを脱ごうとするから、体内の警報機が鳴りまくり「下のロビーで待つてます！」

と言つて慌てて部屋から飛び出した。

あのまま部屋にいてベッドに押し倒されたら逃げられなくなる。奴の思うつばだ。

エレベーターを下りて受付に行き、明日チェックアウトする旨を伝え精算を済ませておいた。

ちょうど彼もエレベーターから出てきた。

Tシャツにジャケットを羽織っているだけなのにかっこいい。

ブラウンの髪は金髪ほど目立たないはずなのに、人の目を引くオーラがある。

サングラス越しなのに、見つめられるとドキツとする。

「精算をしておきました」

と彼に言う

「ありがとう」

と答え、

「本屋は近く？」

「前の大通りを右に行つて、交差点の向かい側です。5分くらい」
「OK」

大股で歩き出す。

ホテルの入り口を出るまでは、また無表情で愛想がない様子だけれど、ホテルを出て歩き出すと、歩くペースを合わせてくれて、ゆっくり話す。

やっぱりこの人はONとOFFがあるようだ。どちらがONなのかOFFなのかわからないけど、人前にいる時は無愛想で無表情、2人していると微笑むし優しい。どちらが本当の彼なのだろう。

この本屋は大きくてビルの1階から4階の広い店舗だ。2階には本を読むスペースもあるし、カフェもある。英訳の本も多く取り扱っているし、映画の本も多くあるのでたまに来ることがある。

英訳の観光ガイドブックをいくつか手に取り、

「下で見えます?」

と言うと

「全部買おう。2階のカフェで見ながら話そう」

そう言って私の抱えている本を全部取り上げてレジへ向かった。

明日見て回る浅草と、鎌倉や関東地区の観光案内の本、それに京都の本が3冊。全部買うとは思わないから適当にピックアップしただけだったのに。

カフェでカプチーノを買って席に着くと、ガイドブックに目を通し

ていた彼が顔を上げた。

「浅草は行ったことがある?」

「あるわよ」

「誰と?」

「外国の映画関係者が来ると案内することが多いからよ」

「そう。鎌倉は?」

「たまに連れていくことがあるわ。大仏が見たいって」

「京都は?」

だんだん何が聞きたいのかわからなくなってきた。

「東京から離れているから、仕事で行ったことはないけど、学生の時修学旅行で行ったわ」

「そう。じゃあ、恋人と行ったことはないわけだ?」

何が聞きたいのかと思ったら、私のこと?なんなの?そんなに興味ある?

きつと顔にも出てたと思う。彼はニヤツと薄く笑ってカプチーノを飲んだ。

「京都のコースは君に任せるよ」

それじゃこんなにガイドブック買って相談することないじゃない！金閣寺、銀閣寺、清水寺、二条城、京都御所などなど。修学旅行コースでいいってことでしょ！

そう言いながら、買ったガイドブックをばらばらとめくって見ている。本を見ているだけなのに、絵になる。長い脚を組んで、椅子にもたれかかって片手で本を持ち、片手はカプチーノをつかんでいる。彼の周りの空気だけ澄んでいるように透明だ。ふっと目があった。

「何かついてる？」

はつと我に返り

「うつつん」

と首を振って答えると

「ふふふ」

とにやけて、まるで私の考えてることを見透かすように笑った。それほど引きこまれるように見入っていた。

また奴の術にはまってしまった。うわついちゃいけない。引き込まれない。自分に言い聞かせる。

「海沿いを通って帰ろう」

そう言う彼に後ろからついて行く。

本屋を出て、交差点を渡り橋まで歩くと、遊歩道が海沿いに続いてホテルまで続いている。

きつと彼は部屋から海沿いの遊歩道を見ていたんだな。だから知っているんだ。

もう夕暮れが近付いている。涼しい風が海を渡っている。

「東京タワーも行きたいな」

「OK。浅草に行く前に」

「東京タワーは行ったことある？」

またこの質問。ちよつと意地悪したくなってきた。

「あるわよ、学生時代に、恋人と」

こつ言つたらどうするんだろうと思つて。

「じゃあ行かない」

「え？なんで」

「つまらない」

ええー？まじわかんない。どうして？どうしたいの？いいじゃない、私に恋人がいようがいまいが。今はいいんだから、過去のことをどうこつ言われてもどうしようもないし。変に過去に嫉妬されてるようでどうしていいんだかわからない。

「弥生の行ったことない所がいい」

「え？」

「弥生の行ったことない所」

「？」

首をかしげる。私の行ったことのない観光地を回つてどうしたいの？新しい思い出を作るの？なんで？

「新しくタワーができるの。スカイツリーっていう東京タワーよりも高いタワー。まだ完成してないけど、浅草の近くよ。そこはまだ行つてない」

「じゃあそこに行こつ」

納得してくれたようだ。なんだか変なことになったな。いちいち過去のことを聞かれてもな。

「あなたには恋人はいないの？」

芸能人に聞くべきことではないのかもしれないけど、私のことばかり聞かれるから聞いてみた。

「いないよ」

足を止め、こちらを向く。

「ずっといない」

真面目に目を見て言われた。告白じゃないんだから、そんなに真面目に答えないで。見つめられるだけでドキドキするんだから。

ホテルに入り、エレベーターへ歩きながら

「君の部屋は？」

「え？」

「呼びに行くよ」

「私は宿泊しませんよ」

「なぜ？」

「家があるから」

「なぜ？」

「家に帰るからです」

「なぜ？」

わかんない奴だなー！私は家に帰ってゆっくりしたいの！旅の用意もしなきゃいけないし。

「予定が決まっていなかったので、今日の宿泊は取っておりません。明日浅草に同行し横浜に宿泊します。その翌日は鎌倉へ行きます。

その次の日から京都へ向かいますから、旅行の準備もしなければいけないので今日は帰ります」

「OK。わかった」

納得していただけたようだ。かなりかみ砕いて説明したし、なんとしても帰らなければ。

「じゃあこのまま食事に行く？」

「はい、そうしましょう。上にレストランがありますので」

ホテルに入って、エレベーターでそのまま3階へ上がる。日本料理店やイタリアン、フレンチなどの店がある。日本料理店へ入って食事した。天ぷらとお寿司を軽く食べ、時間が早いから最上階のバーへ行くことになった。

「電車で帰りますのであまり遅くまでお付き合いできませんが」

「わかってる。あまり遅くならないようにするよ。あまり酔っぱらうと帰りが心配になる」

あまり甘い言葉を囁かないでほしい。そんなに落としたいのか！？そんなに安い女じゃないぜ！ふん。

バーでの話は楽しかった。彼を接待するにあたり、彼についてリサーチもしたし、彼の出演作を数本DVDで見たばかりだったから、彼が映画について話してくれるとどんどん引きこまれていった。

彼の映画に対する姿勢も聞けたし、監督や共演者についての心配りも言葉の端々に感じ取れた。楽しませてもらった。一ファンとしてすごく好感が持てた。飲みすぎとまではいけないけれど、かなりいい気分だったのは自分でもわかった。

コーヒーを飲んで酔いを覚まし、

「もう大丈夫です。すみません。帰ります」というと

「あっちよと渡したいものがあるんだ。部屋に来てもらっていい？」

危険危険。そのまま部屋に連れ込まれたら危ない。返事をしない私に「じゃエレベーターで部屋の階まで来てよ、部屋に入らなくていいから」

「OK」

いっしょにエレベーターに乗り込んで部屋の階を押す。すると、顔を伏せていた私をぎゅっと抱きしめた。パトランプ発動！警告音が頭の中を鳴り響いた。

「弥生」

と頭の上で囁かれた。すっかり彼の胸に押し当てられた顔に彼の顔が下りてくる気配を感じて、右に左に追われる顔から逃げていると、「弥生」

ともう一度耳元で囁かれた。耳の後ろから片手を髪の中に差し込まれ、顔をホールドされた。もう逃げられない。覚悟を決めた。目を

ぎゅっつつぶっていた。

「弥生」

おそろおそろ目を開けると、顔がもう間近まで近づいていた。鼻先が当たるほど。そこから唇を押しあてられた。背中に壁が当たった。チンッとエレベーターがその階に着いたことを知らせると、一度唇が離れて、片手でドアの閉のボタンを押し、また唇にキスをした。

「ごめん。嘘ついた」

渡すものなんて最初からなかったのだ。

そして今度は彼の左手で私の後頭部を押さえ、右手は腰に手をまわし、ぐっと引き寄せられて深くキスをされた。彼の舌が私の唇を舐めた。

1Fに着く頃にはもう足腰に力が入らない状態だった。

「大丈夫？泊まっていく？」

「いいえ。帰ります」

「心配だ。タクシーで帰って」

「遠いから電車で」

「いや、タクシーで」

そう言うとはホテルの入り口のタクシー乗り場まで私を連れて行き、

「タクシーで家まで帰って」

と言ってブラックカードを渡してきた。もう観念しなければ帰してもらえないかも、と思い

「わかったから」

と言ってカードを返し、タクシーに乗り込んだ。

「明日9時に迎えに来ます」

と言うと

「わかった。おやすみ」

と言って、窓からまたキスをしてきた。

運転手さんが見てるのに！

クモの巣に捕まる蝶なの？アリジゴクに捕まる蟻なの？どうしたら、彼に捕らわれずに逃げられるのか、誰かに聞きたい。

今も過去も未来も

昨日は浮き足立ったまま帰宅してしまった。あまりに官能的なキスだったから。

新宿までタクシーで帰り、新宿から電車に乗った。酔いは覚めていた。あのキスで。

私を手に入れるためだけの優しさなのか、嫉妬なのか、キスなのか。こんなことでうかつに足を踏み入れてしまったら、ゴキブリはいのこきちゃんみたいに捕らわれてしまう。甘い汁に惑わされてすすってはいけない。自分をしっかり持とう！と決意したその朝から「Good morning 弥生」とキスされた。

もう！決意宣言したばかりなのに！

ノックしてドアが開いたと思ったらキスされたので、もう防ぎようがなかった。そうそう、外人はキスなんて挨拶がわりだから。深い意味はないよ。ボディタッチも激しいお国柄だし。ということにしておこう。

でも昨日のボディタッチは恋人がするようなタッチの仕方だったよな。顔を両手で引き寄せたり、頭を押さえて腰に手を回したり。昨日の帰りの電車の中でも、ふとんに入ってから、そしてこのホテルに着くまでもずっとずっと考えてしまっていた。

「弥生？」

「あつ、はい」

「ふふふ、どうしたの？上の空だよ」

ガラス張りの私の心を見透かすように笑う。

「いいえ、大丈夫よ。さあ行きましょ」

浅草へタクシーで行く。東京の街並みも眺めながら。

「浅草以外にはどこへ行きたい？」

「皇居」

「OK、そこも回りましょう」浅草に着いて、雷門から歩いて浅草寺へ。一通りお参りしてから、参道の店を見て回る。

彼は自分ではあまり興味を示さないけど、私が興味を示すものに興味を持つ。そういう反応はやめてほしいなあ。

「日本のお土産を買っていくような人はいないの？」

「弥生が好きな物を買っていいよ」

「それじゃあダメじゃない？」

「なんで？」

「気持ちを込めて選んでプレゼントしなきゃ」

「OK」

ほんとにわかってる？

そこから新観光スポットのスカイツリーを見て、美術館めぐりも好きだという話から上野の森美術館も回って見た。最後にタクシーで皇居へ。皇居の周りを少し歩いた。

社長から連絡があり、帝国ホテルで待ち合わせた。明日からの鎌倉観光に自分の車を使っていいからと貸してくれた。宿泊する横浜のホテルに置いておいてくれたら取りに行くからと。社長の車はプジョー。左ハンドルだ。あまり慣れないけど、直進なら大丈夫。

「いざとなったらジョンに運転してもらいなさいよ」

加賀美社長はそう言うけど、お客さんに運転してもらうわけにはいかないよね。

そこから横浜までは海沿いをドライブだ。ベイブリッジを渡り、コンチネンタルホテルを見せた。

「横浜には恋人たちのデートコースの海辺の公園やレストランがあるそうだから、そこを歩いてみたいな」あれからガイドブックを読みまくったな。それは恋人と歩くコースで、旅の添乗員と歩くコースではないでしょ！？と思うけど

「わかったわ。明日の夜はそちらに行ってみましょう」

と笑顔で答えた。そうそう、こうやってスルーすればいいのよ。こころ乱さず、落ち着いて落ち着いて。

今日はホテルで食事をする。

昨日はしゃぎすぎて気持ちのいいままとんでもないことになったので今日は警戒して最初のワインだけにした。

明日も早いし、仕事をしなきゃいけないので早く休もうと言って、今日は食事の後のお付き合いはきっぱり断った。フランスの映画祭に行っている棚橋さんのスケジュール調整をして、会社にいる他の事務員にも仕事の指示をメールする。クライアントとの調整は社長がやってくれているだろう。

翌朝、やはり彼の部屋をノックをしてドアが開くとジョンはキスをしてきた。

朝食をとって、出発する。

高速を乗り継いで逗子インターへ下りる。湘南を海沿いに走れば鎌倉を通って江ノ島まで観光コースだ。

「湘南は恋人たちのドライブコースと書いてあった」

横浜といい、湘南といい恋人たちのコースというものに弱いらしい。

「途中に極楽寺というお寺もあるらしいよ」

「よくガイドブック読んでるね」

それには答えず

「湘南はドライブしたことある？」

また来た！この質問。ほんとに学生時代に恋人と来たことがあるけど、面倒なのでもう言わない。

「ないわよ」

「ほんとに？」

「うん」

返答がない。運転しているので顔を見れないけど、怪しんでいるのかも。嘘が下手なのかな。

鎌倉に到着して、鶴岡八幡宮を回り、鎌倉大仏を見て、近くの蕎麦屋で食事する。カーナビで設定しておいてよかった。その後極楽寺へ向かい、海沿いに出て江ノ島へ向かう道は私でもわかる。

駐車場から出る時にバックが危なっかしいと運転を代わってから、もう運転する権利はすでに譲渡されてしまったようだ。鍵を返してくれないし、当たり前で運転席に移動する。

「何かあったら困るから。保険もついてないし」

と言っても取り合ってくれない。

「君に僕の命を任せられない」

と言い切られた。あきらめた。

江ノ島で、

「上に植物園があるよ。行ってみる？」

というと、

「サンセットがきれいそうだ」

と言った。

ほんとに海に沈んでいく太陽を見ることなんてないもの。感動する。

「彼と来た時は見れなかった？」

なんで、彼と来たことがあるってわかったの？

驚いている私を見て

「やっぱりね」

と言った。

「かまかけたの？」

「来た事がないのに植物園があるのはしっかり知っていたでしょ？」

あ、私がばらしてしまっていたか。

「嘘はつかないで」

「ごめん」

「僕も過去に嫉妬するのは抑えるよ」

恋人でもないのに嫉妬するなんて、まだ出会って3日目の私にそん

なに嫉妬するの？自分だけを見てくれってこと？すでに昨日からあなたのことばかり考えてるわよ。あなたしか見てないし。だったらいいじゃない！

まるで私の思ったことを感じ取ったように私を見つめる。

「君の今も過去も未来も受け止めたい」

「どうして？どうして私なの？」

「出会ってしまったから」

「日本人が珍しいのよ」

「違う。弥生だから」

「日本に滞在している間の日本の愛人にしたいの？」

「違う。ただ君に心を開いてほしいだけ」

「わからないわ」

「君に引き込まれてるのは僕だよ」

「私はなにも！」

そう言ってる私にお構いなしに、腰に当てた左手にグツと力を加え肩を引いて私の体を右に回すと耳の後ろから髪の中に右手を差し込んで、唇を捕らえる。

ああまた！固い決心はどこへ？！私を惑わせないで。

チュツと離れたと思っただけ両手を髪の中に差し込んで顔の向きを変えてまたキスをする。向きを変えながら、唇を挟んだり、舌を入れてきたり、だんだんヒートアップする彼から逃げようと両手で胸を押すのにまったく逃げられない。

「ちょ、ちょ、ちよっと！」

胸をたたいて、やっと離れた。

「なに？」

「舌は入れないで！」

「愛情表現だよ」

「困るから！」

そう言いながら早足でその場から立ち去る。危ない危ない。危うく応えてしまいそうになる。甘い甘いキスに溶けてしまいそう。

横浜の夜

江ノ島から横浜へはどこにも寄らずにまっすぐ帰った。渋滞する海岸線を走り、高速を使ったから寄り道する場所もなかったのだけだ。途中でうとうととしてしまつて、

「着いたよ」

と声を掛けられたら、ホテルに到着していた。

恋人たちのデートコースを歩くため、すぐ出かける。

コスモワールドの観覧車を眺め、赤レンガ倉庫へ。賑やかなビアホールみたいなレストランで食事をした。そこから山下公園はちよつとあるけど、歩きながら話をしていたら気にならなかった。氷川丸の灯かりにうつすら照らされたベンチへ。

肩に手を置かれ抱き寄せられる。なんかもう簡単にキスされてるみたいに思われるのも癪なんですけど。彼のこと嫌いじゃないけど、そんな簡単に口説かれたりしないんだから！

「少し歩いたら中華街があるよ。そこで何か飲む？」

「もつと静かなバーがいい」

「どこがいいかな？」

「ホテルに戻ってバーで飲もう」

酔つたところを襲うつもり？そうはさせないわよー。部屋に入ったら絶対鍵は開けないんだから。

もちろん彼の部屋へも入らない。

タクシーを捕まえてホテルへ帰る。結構今日は歩いてるから足が疲れてる。

「あまり遅くまで付き合わないわよ」

「出会った日もそう言つて帰つたよね」

「ゆつくりシャワーあびて寝たいの。睡眠不足はお肌の敵なの」

「一杯だけ付き合つて」

「一杯だけよ」

ホテルに戻ってバーへ行く。

「僕の話をするよ」

そう言って彼は自分の育った故郷や学生時代を過ごしたカリフォルニアの話、ニューヨークでの生活を話し始めた。彼のサクセスストーリーはインターネットで調べればすぐ検索されるけれど、彼の痛みや挫折、想いや夢を聞いたら、彼も私も変わらない人間なんだなっと思う。育ってきた環境も文化も違うけれど、人間としての根本はいっしょじゃないかなって。

私は失敗しないように飲み方をセーブしていたけど、彼はいつの間にかすっかり酔っぱらってしまい、眠そうだ。そういえば、日本にきてから3日目でもまだ時差が体に残っているのかもしてないな。

「もう部屋に上がって休もう」

「OK」

そういつて立ち上がるがふらふらしてる。えー！ちよつと待つてよ。これじゃあ部屋までつれて上がらないといけないじゃん！

「肩につかまって」

というと背の高い彼に覆いかぶされるようだ。エレベーターに乗り込むと、完全に抱きしめてきた。

耳や首に絡みついてキスをしてくるのを、振り払って

「酒臭い」

「ごめん」

「眠いんですよ？」

「うん」

「おとなしく寝なさい」

「うん」

同じ階だとなにかあると困るので、別の階にしてもらった。

エレベーターを下りて

「部屋まで行ける？」

「大丈夫」

「ほんとに？」

「もちろん」

そういうので

「じゃあ明日の朝7時に朝食に呼びに行くわね」

「OK」

と言ってエレベーターから下りる。エレベーターで一つ下の階に下りたものの、心配になってもう一度上の階へボタンを押した。

エレベーターを下りて廊下を左に曲がったところで壁によっかかって座り込んでいる彼を見つけた。

「もう！大丈夫じゃないじゃない！」

「うーん 弥生、愛してる」

「もう！やめてってば！酔っ払いは嫌いよ！起きて！」

そう言つて腕を引つ張り起こすがなかなか重たい。

「ねえお願い。こんなところで寝ないで。起きてベッドに行つて」

「うん」

自分で起き上がってくれたので、体を支えて歩き出す。

「カードは？」

「ポケット」

胸のポケットから鍵のカードを出して差し込んでドアを押す。

「ジョン、ベッドまで歩いて」

「OK。弥生、いっしょに寝よう」

「え！え！困る！困るって！ちよつと！もう！」

ドサツとベッドに押し倒された。もう！だからやなんだってば！

動く気配のない隣を見ると、ジョンはすーすーと寝息を立てて眠っていた。

ほー。よかった。ほつと息をついて、体の上の左手をゆっくり持ち上げてずらす。

やっぱり疲れてるんだな。かわいい。寝顔を見ながらくすつと笑ってしまった。

靴を履いたままでは窮屈だろうと、靴を脱がせて、上掛けを掛けてあげたいけど完全に体の下だから体をどけて布団を取り出すことは無理だ。目が覚めたら自分で何とかするだろう。

もう一度顔を見ると、本当に端正な横顔で、こんな人に酔った勢いでも「I LOVE YOU」と言われたなんて幸せだな。と実感する。じーつとその横顔を見て、チュツとほっぺにキスをした。

「Good night」

そう言って、部屋を出た。

明日は京都へ移動だ。

京都1

ホテルで2人で朝食をとって、フロントに車の鍵を預けたら、タクシーで新横浜へ移動する。新幹線に乗って京都へ。

新幹線の中、外を眺めるジョンが急に手を握ってきた。

「え！ちよ、ちよっと」

「手ぐらい触ってもいいでしょ。誰も見てないし」

いきなり指をからめて恋人つなぎをして、そのまま私の手の甲にキスをする。そのまま私の手をサンドイッチするように両手で挟み、自分の体の上に置く。

「何もできないじゃない」

片手を取られて、本も読めないし、お茶も開けられない。

「ねえ」

と顔を近づけて耳打ちしてくるので、ひそひそ話なんだろうなと思つて耳を近づけると、チュツと耳にキスをして耳たぶを舐められた。「ちよっと！もう！」

ニヤツと楽しそうに笑つてる。私は顔が真っ赤になる。右手を取られているので、左手で右耳をふさぐ。

その瞬間に今度は口にキスされた。もう！もう！やりたい放題？

「朝、キスを避けたから」

朝彼を呼びにドアをノックした後、キスを避けるために廊下の壁まで下がってけん制したのだ。

「昨日の夜は自分からキスしてくれたでしょ？」

と頬を指さす。

「起きてたの？」

「なんとなく感じてた」

寝てると思ってあんな大胆なこと（と言ってもほっぺにチュくらいのことだけ）したのに。

ますます奴の手のひらで踊らされてるみたい。

そのまま京都まで約2時間、手を絡み合わせたまま極甘な言葉を囁かれた。

京都に着いてから、駅から近いホテルだからタクシーでチェックインに向かい、そのまま清水寺に向かった。近くの食事処で昼食を取り、清水寺へ向かって歩く。途中の坂道で、彼が手を差し出してくれたので、手を握ると、優しい顔で微笑まれた。それから、当たり前のように手をつないで歩いた。

「思い切って大きな決断をすることを、清水の舞台から飛び降りるって言うのよ」

「へえ、じゃあ僕は君のために清水の舞台から飛び降りるよ」

そう言って舞台の大きな木の柵に脚をかけようとする。

「ちよつと！ほんとに飛び降りることじゃないわよ！」

慌てる私を見て笑ってる。

「もう！また騙したわね！」

そう言って彼の体を叩く手を取る。またその手にキスをして

「本当だよ。君のためならこの舞台から飛び降りるよ」

また甘々な言葉を囁かれた。

タクシーで東本願寺に移動して散策した後、ぶらぶらと市内を歩いた。

「明日、金閣寺と銀閣寺に行きましょう」

夕方になると舞妓さんが小路を歩く姿が見られ、彼が

「舞妓が見たい」

「舞妓さんのいるお座敷はお茶屋さんと言って、お茶屋さんは一見さんお断りで、初めてのお客さんは入れてもらえないの。常連さんに紹介してもらわないと行けないから、急には無理よ」

「いや、弥生の舞妓姿が見たい」

「なに言ってるの？」

「舞妓の体験もできると書いてあった」

なんてことがガイドブックに載ってんのよ！こんな時の彼の素早い対応はなんなの？ホテルに帰るとフロントの人に紹介してもらい、早速お店に連絡をとって、

「ちょうど明日キャンセルが出て、朝9時にきてもらえばできるそうです」

と予約を取りつけている。

「場所が金閣寺の近くの店なんですけど」

「明日行く予定にしていたので、ちょうどよかったです」

「舞妓姿で金閣寺で記念撮影できますね」

とジョンとフロントの人はとても嬉しそうに語り合っていた。いやいや、なんで私が舞妓に？私の意見はそっこのけで話は決まっていた。

「今日の夕食は決まってる？」

「加賀見社長が予約を入れておいてくれた京料理のお店、7時よ」

「わかった。明日は？」

「決めてないわ」

「明日は僕が予約するよ」

「OK」

それから一度部屋に分かれて、6時半にロビーで待ち合わせした。

部屋で会社連絡し、仕事の用件をすませ、社長に報告しロビーに行くと、彼はフロントで話をしていた。明日の夕食のお店のことを聞いているんだわ。

エレベーターから降りた私を見ると、フロントに挨拶をしてこちらへ来た。

彼はあれから必ず手をつないでくる。一度クセがついたらなかなか直らないらしい。ロビーから出る時も、タクシーの中も、街を歩く

時も。お店についても離してくれない。まるで恋人みたいに。食事を終えてまたタクシーで帰路につく。その間も手を離さない。

「昨日飲みすぎたから、今日は軽く」

「昨日もそう言ってたわよ」

すっかり眠ってしまった昨日のことは

「時差のせいだよ」

と言って

「部屋で飲まないか？」

その手には乗らないわよ。はっきりNOと断って、

「バーで」

と答えた。部屋で飲んだら、いつベッドに押し倒されるかわからない。

バーで彼はほんとに2杯しか飲まなかった。

「明日に備えて、ゆっくり休もう。お肌の調子を整えてね」

ウイंकをするあたり、かなり確信犯だ。最初から舞妓のこと考えてたな。

「さっきフロントと話した時に言われたんだけど、明日はホテルの都合で部屋が替わるらしい。荷物をまとめて朝預けてほしいって」

「あ、そうなの？わかった」

バーを出てエレベーターに乗って部屋の階へ行くまでの間、抱きしめられた。助かったと思うのは、彼がまだやらしい手つきで触ってこないこと。抱きしめられたり、キスされたりするけど、そこまで、実際その先まで求められたら、自制できるのか自信がない。心はもう捕らわれてるかもしれない。

部屋の前で

「Good night」

と言って

「Good night」

と言ってキスしてきた。いつもの挨拶のキスだと思って離れようとすると、グッと引き寄せられ、深い深いキスを長くされた。彼とこ

んなに深いキスはしたことがなかった。舌を絡め、何度も顔の向きを変えてすべてを吸い取ってしまうような。彼の手は私の髪の毛の流れを変えてしまうみたいに髪の毛の1本1本に絡みつく。もう立ってられない。そう思った時、体を離れた。

「弥生、大丈夫？」

もう顔が上気して、何がなんだかわからなくなるくらい、彼のキスに溺れていた。

頷いて、かろうじて持っていた鍵を差し込み、部屋に滑り込んだ。ドキドキが止まらない。しばらく鼓動がおさまるのを椅子に座って待っていた。この人は初日から爆弾落としまくって、私を翻弄するのよ。待つて、待つて、落ち着け、私。ふー、ふーと息を吐いた。隣の部屋には彼がいる。手を伸ばせば、きつと手を取ってくれるだろう。抱きしめてくれるだろう。でも、いいの？それでいいの？想いは届くの？ここで流されても、行き着く所はどこ？悲しい涙を流すのは、もういや。

とりあえず落ち着いてきたので、シャワーを浴びることにした。明日の移動のための荷造りもしなくちゃいけない。でも、まだ一泊目で旅行用キャリーバッグを開けてもないから、今日あまり店を広げずに、明日の到着替えてから片付ければ完了だ。

シャワーも浴びてスッキリして、まさかこのすっぴんの状態の今、隣から夜這いとか来ないわよね？いや、いざとなったらってドアを開けなきゃいいんだから、大丈夫だ。心を強く持とう。彼の強引さに負けちゃダメだ。そう言いながら、ベッドに入ってもなかなか寝つけなかった。

翌朝は出掛ける準備をして荷物を持ってロビーに8時にと約束をした。ロビーに降りるとすでに彼は降りており、手を振って合図をしている。荷物を預け、朝食をとり、タクシーで出掛けた。

金閣寺近くのお店で舞妓体験をする。着付け込みで2時間半のコースで、60分間の自由散策時間があるので、そのまま出かけてよい

とのことだった。

「彼氏さんは着付けもごいっしょされますか？」

「はい」

堂々と彼氏になつてゐる！下着姿は見せれないが、長襦袢を着つけて化粧段階になつてからジヨンはずっと近くで私が変わっていくのを見つめている。

化粧から着付けまでかなりの時間をかけて変身していく中で、自分の中の変化にも気付かされてしまう。

私が私でなくなるような、でもこれすべてが私のような。

記念写真を撮つて、やっと自由散策だが、普段着なれない着物を着て、さらに高い履物のおこぼを履くと歩きづらくて遠出をしようと思わない。それでも金閣寺の前でだけは写真を撮ろうと彼の腕にかまつて歩いていく。何人かの観光客に写真を撮られて撮ったけれど、本当の舞妓さんではないので・・・と口々に言い訳をした。着物を脱いで、はあゝと一息ついた。舞妓さんって大変だわ。

午後は銀閣寺へ。そして夕方。彼の予約してあるお店に行くことになった。

「予約は何時から？」

「いや、いつでも大丈夫」

「そうなの？」

そしてそのお店に着くと、旅館のような佇まいだ。たたず

「いらつしやいませ。ご予約の方ですね。お伺いしております。お荷物はもうお部屋に運んでありますので」

お荷物？と不思議に思いながら、案内された部屋に通されると、それぞれが庭園の中に独立した離れになっており、完全に個室だ。

「お食事は6時に運んでまいりますので、今しばらくお待ちください」

と仲居さんに言われた。

「え？ここで食事するの？」

「いや、宿泊するんだ」

「え？」

「ホテルはキャンセルさせてもらったよ。荷物は運んでもらった」
そう言っていると、部屋の奥に私の荷物がある。

「え？えー！？」

なんと彼はフロントの人に紹介してもらって、ホテルをキャンセルして荷物まで移動させていた。

「だ！騙したわね！」

「彼女をサプライズさせたいから、と言ったら、喜んで協力してくれたよ」

なんてこと！今日は2人で同じ部屋で？ええー！！そんなこと企んでいたなんて！

京都2

「弥生」

「弥生」

何度か彼に呼ばれているのだけれど、あれから私は30分も荷物の横に座り込んで、悩んでいた。どうしたらこの状況を打破できる？ 同じ部屋で一夜を共にするなんて、危険！危険！なにが起こるの？ なにをしたいの？避けてきた道なのに。

明日には京都から東京に帰り、観光旅行は終了。私も明日で解任され、営業担当の棚橋さんに任せる。言わば、最後の夜、なのである。

「お食事用意させてもらて構いませんか？」

仲居さんが声をかけてきた。

「は、はい」

彼は庭に続く縁側で椅子に座り庭を眺め、私は相変わらず荷物の横で固まっていたままだ。

「お食事の説明をさせてもらてもよろしゅうおすか？」

「はい！」

そう言つて、机の横に近寄り座布団に座ると、彼も向かい側の座布団に座った。

「こちらが京野菜と…、はもの…、湯豆腐は…、こちらが丹波牛の…」

彼に英語で説明するが、はも？はもって英語で何て言うの？適当にごまかしながらなんとか説明した。

「では、ごゆっくり」

そう言つて仲居さんは部屋から立ち去っていったが、残された2人になるとたんに気まずい。

「おいしそうだ。とりあえず、食べよう」

そう言われて、とにかく落ち着いてみよう、

「そうね、せっかくだし、いただきましよう。」

あまりの美味しさに舌鼓を打った。静かに食事をいただきながら、今日の彼のことを考えていた。

舞妓さんに変身する間、彼は私の横ですっと静かに見ていた。何も言わないで、でも片時も離れず、目をそらすことなく見つめられていた。彼の目を見れなかった。オーバーアクションのほめ言葉なんてかけられていたら、むずがゆさにいたたまれなかった。引いてしまっていたらうな。

鏡の中で変わっていく私が、私自身に自信をつけていった。写真を撮る時、凜と背筋を伸ばして立っていられた、あの瞬間も彼はじつと見ていた。何も言わなくても、手を差しのべてくれたり、「大丈夫？」と声をかけてくれた優しさは私が一番感じていた。本物の舞妓さんではない私には自信がなく、観光客に声をかけられてもうつむきがちだった。でも彼は、観光客に声をかけられると嬉しそうに、少し離れて見ていたり、カメラを預かって写真を撮ってくれたりしていた。彼に見つめられると、背筋が伸びた。

「いつしよに過ごすのは嫌？」

彼が聞いてきた。

「怖い」

「なぜ？僕が信じられない？」

「あなたは違う世界の人だから」

「同じ人間だよ。仕事をして、生活している。君と同じ」

「わかってる。」

頭ではわかってる。

「僕は27才の時、婚約者がいた。彼女と一生いつしよにいるつも

りだった。いられると思っていた」

日本でも報じられ知っていた。その後、破局したことも。

「あの頃僕は俳優として人気が出てきて、モデルから俳優への転身が成功したことでおごりがあった。何でもうまくいくという自信が過信になっていた。そんな僕の言動から、彼女との一つ掛け間違えたボタンは、ずれたまま合わさることができなくなった。あれから今まで、真剣に恋したことがなかった。君に出会うまで、本当の恋ができなくなっていたんだ」

真剣な目で見つめられる。背けることができなかった。

「失礼します。お片付けに入らせていただきます。お布団のご用意もさせていただきますので」

ますますその時が近づこうとしている。どうしたらいい？私は受け入れていいの？帰るなら、逃げるなら今しかないんじゃない？

「弥生」

彼が呼ぶ声がすると、手を取られて、

「庭を歩こう」

と縁側にある下駄に足を入れて、庭に降りた。

もう夕暮れが深く、辺りを暗くしていた。どこか遠くでお寺の鐘が鳴る音がした。

「気をつけて」

踏み石や庭の造りが見えづらく、転びそうになる。

手を取り合って庭を歩き、部屋に戻るとすべて片付いていた。

「シャワーを浴びる？」

「え？わ、私は大浴場で」

「個室の温泉だけしかないって。outdoor bath？」

「露天風呂ね」

ふう。あきらめるしかないのかしら。でもいつしょになんて入れないわ。

「一人づつなら…」

「いいよ」

「絶対、入ってこないでよ！」

「わかったよ」

ニヤニヤ笑ってる。もう！どうしてこんなことになっちゃたんだろう。覚悟をするの？覚悟を決めるの？観念するの？最後の夜の一夜の夢なの？そう、それでもいいのかもしれない。もう彼と会うこともない。住む世界の違う人だもの。こんなに素敵な人に今だけでも想われて、想いを遂げるのも幸せなのかも。私が、私がわかっていればいいこと。私さえ、ちゃんと気持ちをコントロールできれば、素敵な一夜になれる。差しのべた手を掴んでくれる。そのまま離さないで、とは言えないけど、今だけ、今だけ掴まえていて。と言えはいいの。そして、谷から落とされる前に自分から離せば、うまく着地できるはず。

彼が先にシャワーを浴びる。露天風呂はジャグジーのようなものと説明した。

彼には浴衣が小さい。足が長く裾から出てしまう。今になって、心から笑える程、気持ちが落ち着いていた。

「合わせが逆になってる」

彼の前に立ち、合わせを直す。

「帯も上過ぎるわ」

帯を緩めて、合わせを直し、帯を巻きなおそうと彼の背中では片手から片手に帯を渡すと彼を抱きしめてるように、私の目の前には彼の胸がある。身長が190cmもあるのだから私と30cmも高さが違う。帯を結びなおすとそれまでじっとしていた彼が私の背中に手を回して抱きしめてきた。彼の胸の鼓動を聞くように頭を胸につけていた。静かなゆっくりとした空間だった。私の顎を上に向かって唇を合わせる。ゆっくり合わせて離れて、またゆっくり合わせる。

彼が私のカーディガンのボタンに手をかける。

「ま、まだ」

「どうせ脱ぐのに？」

「自分でするから」

そう言つて余韻を惜しむように離れ、着替えを持つて脱衣所へ行く。外からは見えない半個室のような部屋でシャワーを浴びて、露天風呂に入る。彼が来るとは思わないが、万一のことを考えてタオルで体を巻いて露天風呂に浸かった。さっき歩いた庭とは完全に隔離された小さな庭を見ながら温もった。私も浴衣を着る。

部屋に戻ると、彼は縁側でビールを飲んでいた。そうだね。飲んでいい気分になって、わからなくなってしまえば気持ちも楽というものだ。

「私も飲ませて」

と言つて、彼と一緒に飲み始めた。

私の話を始める。

「社会人になつて、好きな人ができたの。年上で優しい人で、仕事も教えてくれて、ほんとに手とり足とり業界のことから社会人としての心得を教えてくれた。私は彼に引きこまれた。学生同士ではなく、初めての社会人だった。でも、浮かれていたのは私だけだった。彼には彼女がいたの。気がつかなかったのは私だけ。周りのみんなは知っていた。周りのことが何も見えなくなつてしまったの。手を出したのがどつちとかそんなことじゃなく、自分のことだけ考えてた。彼は彼女と別れる気もなかった。でも、彼の優しさにすがりついてしまったの。結局、悲しい思いをしたのは私だった。そういう恋はしたくないの」

最初の頃、あれだけ過去に嫉妬しまくっていた彼は、何も言わずに聞いていた。ゆっくり私の手を掴んで、自分の方に引き寄せる。立ち上がつて彼の方へ移動して、椅子に座る彼の足の上に横に座った。右手で私の背中を抱き、左手は私の右ほほを触る。優しくキスをす

る。

「君しか見てない。君しか見えない」

右手が耳の後ろから髪の中に差し込まれ、両手で頭をホールドされて、深い深いキスをする。

「あなたと恋をする気がしてた」

そう言つと、優しく微笑んだ。

私の耳を触り舐め唇で挿^はんで、首筋から鎖骨へ唇を這わす。浴衣の合わせをどんどん広げて、肩をあらわにした。左肩にキスをして、唇を這わせたまま右肩にキスをして、ブラの肩ひもを落とす。太腿にも這っていた彼のせいで裾もすっかりはだけて両脚も露わになっていた。帯を緩める。袖も肘まで下がり、背中も露わになって、ブラをはずし落としてしまう。背中にある彼の手に上半身を預けてのけぞり、乳房に彼の舌が這う。乳首を舐められる。もう、一夜の夢の中へ。

「まるでアプリコットのようだ」

彼はそう言った。白く大きな桃より、小さな赤い皮の、中は熟れて黄色い。酸味の中に甘い甘い果汁が溢れる。アプリコットのなかからは、甘い甘い蜜が溶けだした。感じるほどに溶けた蜜は、アプリコットからとめどなく溢れた。溢れる愛は私からも彼からも一夜のうちに何度溶け、何度溢れだしたのだろう。彼の優しさはいつも変わらず、その時もその時も私を感じさせ、絶頂へと誘^{いざな}った。

朝起きると、私の体にはたくさんの愛の跡が付いていた。体が震えるほど嬉しいのに、一夜の夢が覚めたことを感じた。彼の背中を指で触る。今日、東京へ帰る。

東京へ

朝の光の中に彼の寝顔を見ていた。布団から出ようとすると

「どこへ行く？」

「シャワーを浴びに」

「だめ」

腕を引かれ、彼の体の上に倒れこむ。

「離さない」

と抱きしめられた。

「だめよ。もうすぐ仲居さんたちが食事の用意に来るわ」

「離れられない」

そう言つて、唇から首筋、鎖骨をつたつて胸におりてくる。

「あ、だめ……」

「君のアプリコットからは甘い果汁が溢れてくるよ」

「やめて」

口ではそう言つても体も心もう止められなくなっていた。

肩で息をする。息を整えて、私の体を抱きしめる彼の腕をゆるめる。
「シャワー浴びてくる」

体を起こして脱ぎ散らかされた浴衣と下着を拾い上げ、浴衣を羽織るとそそくさと部屋をでた。

シャワーを浴びて露天風呂につかっていると、彼もやってきた。そのまま私の入ってる湯船に入ってくる。

「入って来ないでって言ったのに」

「もう君の全てを見てる。恥ずかしいことは無いよ」

私の背後に回り、後ろから抱きついてくる。わきの下から回した手を私の胸の上に置く。

「やめてってば」

うなじにキスをして、首筋を舐める。振り向くように首を回してキ

スをする。
ぬるいお湯でよかった。のぼせてしまいそう。すっかり長湯をしてしまった。

午後からの新幹線で東京へ帰り、夕方最初のホテルで社長と棚橋さんと出会う約束だ。そこで担当を交代し、私は通常業務へ戻る。あと少し、この時間はあと少しだけ。

「どこか行っておきたい場所はある？」

「弥生といっしょにゆつくりしたい」

チェックアウトぎりぎりまでここでゆつくりすることになった。

「君に渡したい物がある」

そう言つてバッグの中から箱を取り出した。

「なに？」

「開けてみて」

包んだ箱を開けてみると、舞妓体験で行ったお店で私が見ていたかんざしがあった。

「お土産は気持ちを込めて選ぶべきだと君が言った。君の事を考えて選んだ」

キスをしながら

「忘れないで」

と彼は言った。

帰りの新幹線でもつないだ指を絡ませたまま、見つめられてキスをしてくる。

「ママー！前の外人さん、チューしてる！」

静かな車内で後ろに座っていた男の子の大きな声が響いた。

恥ずかしくて、穴があったら入りたい。彼は何を言われたかわからない様子で、きょとんとしていた。訳してあげると嬉しそうに笑った。そしてキスをした。

東京駅で下りる時、後ろの座席の男の子に

「いい男になれよ」

と言って、頭をなでていた。

甘い甘い時間は終わりを告げようとしていた。手を離さなければ。

そう思うのに、彼と絡めあった指を離せないでいた。ホテルへ向かい、チェックインをする。

「スイートに変更しよう」

「いいえ」

「どうして？」

「私は家へ帰ります」

「今日もいっしょに」

「いいえ」

フロントの前でいい合いはしたくはない。

「まだ時間ある？」

「5時に社長と約束しています」

「じゃあ部屋に」

「いいえ」

ふせ目がちになる私を見つめてくる。

「弥生？」

「お部屋にあがられるなら、私はロビーの喫茶で待ってますのでど
うぞ」

「弥生」

首を振る。

「じゃあ僕もきみといっしょにいる」

そう言つて、ポーターに荷物を預ける。

喫茶に移動して、コーヒーを注文する。

テーブルの上の手を私の方へ伸ばし、

「手を」

と言うけど、首を横へ振る。

「僕を信じて。これで終わりじゃない」

「自信がない」

「どうして？」

「あなたは帰ってしまうでしょう？」

「また来るよ」

「約束はないわ」

「気持ちの問題だよ。君と僕との」

首を横へ振る。

「この気持ちは止められないよ。じゃあ君は止められる？忘れられるの？」

この濃縮された5日間の出逢いが、どこまで私の中に影響を与えるのかわからない。いなくなってしまうえば、それまでかも。明日から、彼はプロモーション活動のためあわただしい3日間を過ごす。会うこともない。4日後には帰国するのだ。置いていかれるのは私。

いつの間にか時間がたっていた。もう5時になる。

「加賀美社長と棚橋が来ます。そうしたら私は会社に戻りますので」

「弥生」

「ありがとうございます。楽しい旅行でした」

涙が溢れてくる。

「弥生」

彼の手が私の顔にのばされた時

「お待たせしました」

加賀美社長と棚橋さんがやってきた。

「あら、どうしたの？」

私の潤んだ目に気付いた社長が声を掛けてきた。

「楽しい旅行だったので、別れを惜しんでいました」

「そうなの？よかった。楽しい旅行になって」

「じゃあ、私は社に戻りますので」

「いっしょに夕食行きましょうよ。旅行の話も聞かせてほしいわ」

「ミスターナービスからお聞きになって下さい」

「では」

「弥生」

立ち去ろうとする私にジョンが近寄ってきた。

「ありがとう。本当に楽しかった」

ハグとキス。そう、これは挨拶の。

「弥生、愛してる」

耳元で囁く。

「ありがとうございました。さようなら」

また涙が溢れた。

PRキャンペーン中

翌日から2日間休みを取っていた。

わがままなハリウッド俳優のおもりをさせられて、きつと疲れて帰ってくるだろうと読んでいた。1日は旅の片づけをして、1日はゆっくり体を休めるつもりで。

こんな気持ちで休みを過ごすことになるとは思っていなかった。このキャンペーン中も、彼と過ごすことができなかったわけじゃない。スイートで蜜愛を重ねることに心が揺れなかったわけじゃない。でも終わりはくる。終わりを先延ばしにするだけの話だ。だから、すぐに帰った。現実に関自分を置くために。社に戻って少しでも仕事を捌いておかなければと思った。

明日には監督と共演の女優が来日して、記者会見と各マスコミとのインタビューがある。2日目はテレビ局を回って、情報番組に生出演して映画のPRをする。そして3日目に日本レビュー。試写会を行うのだ。そして4日目には全員が帰国の途に着く。そちらのスケジュールは棚橋さんがすべての担当なので、私が出ることはない。会社で通常業務をこなすだけだ。

洗濯物をしながら午後の情報番組を見る。記者会見の様子が流れていた。

「今回の映画では、偶然出会ったヒロインとのラブストーリーがもう一つの重要なストーリーになっていますが、あなたには偶然出会った忘れられない女性はいらっしゃいますか？」

「います」

「それは今？現在進行形？」

そんなきわどい質問するな！インタビューにどなりたくなる。

「そうですね。僕の心にぬくもりを与えてくれる女性です」

「おおー！それは？」

「この放送を見てくれているあなたです」

はあ。緊張した。こんなことで緊張していたら身が持たない。名前を言うわけないんだから。惑わされるな！

さすが、注目されている俳優だけあって、どのワイドショーも取り上げてくれていた。

「今回早く来日して、観光をしていたそうですが、どちらへ？」

「浅草、鎌倉、京都です」

「そうですか！視聴者の方からFAXで目撃情報が来ていたんですよ。えー、先日京都でハリウッド俳優のジョン・ナービスさんを見ました。舞妓さんと歩いていました。綺麗な舞妓さんと背が高くてオーラのあるジョンさんだったからすごく絵になっていました。ということですけど、本当ですか？」

「そうです」

「舞妓さんを見たのは初めて？」

「はい。とても彼女は美しかったです」

そんなこと言わないでー！うぬぼれてしまうわ！一人なのに顔が赤くなってしまう。

結局休んでいた2日間、家でワイドショーばかり見ていた。

出社した日、加賀美社長から連絡があった。

「試写の人手が足りないのよ。こっち来て」

え！？会いたくないのに。

「受付とか通訳とか運転手とか、忙しいのよ！」

「わかりました！」

行かざるを得ない。

できるだけ彼に近寄らないように、裏のさらに裏方に徹した。

日本レビューが終わると、マスコミ関係者、映画関係者を招いて、ホテルで打ち上げをする。

存在をバレないように隠れて過ごしていた。唯一近づいたのは、会場の受付にいた時、入場する彼を見たときだ。主演俳優として、バリツと決めていた。

「打ち上げ終わったら、運転手」

「はい」

「ジョンを横浜に送って」

「は？明日帰国ですよ？」

「そうよ」

「なんで横浜なんですか？」

「ジョンだけ今日は横浜コンチネンタルに宿泊」

「何ですか？」

「さあ？本人の希望よ」なにわがまま言ってたんだか！

「運転手に弥生ちゃんを希望したのも彼よ」

「社長！」

私をなだめるように加賀美社長は私の肩をぽんぽんと叩き、

「あのね、弥生ちゃん。彼、本気よ」

「あなたが旅行から帰って来た日ね、スケジュールをミーティングした後、棚橋君と3人で飲んだのよね。そしたら、彼、あなたのことばかり話すから。ふふふ。恋しちゃったのね？って言ったのよ。まあ聞くまでもないんだけど、バレバレだから。」

もう！バレまくりじゃない！

「話聞いててね、棚橋君も責任感じちゃって」

「え！？」

「社会人になってからのトラウマなんて言ったら、棚橋君のことしかないじゃない！」

「そんな話までしちゃったんですか！」

「あの時はほんと、辞めるつもりだったでしょ？それを引き止めて私のそばに置いて、棚橋なんて人のいいだけのおんぼんたんだから、あんな奴よりいい男がいる！って説得したよね」

社長に厳しく優しく指導してもらい、今の私がある。今、棚橋さんといっしょに仕事できるようになったのも、社長のおかげだ。

「私はね、彼は本気だと思う。だから、彼の気持ち、受け取ってあげて」

会場の一番中心でスポットライトを浴びて、このプロジェクトの中心にいる彼を遠くから見ながら、国も人種も言葉も文化も違う、こんな隅っこにいる私のどこがいいの？と思う。

「私の車使って」

「わかりました」

すべてのイベントが終了して、それぞれが仕事の話や片付け、飲みに行く話を行っていた。

「三橋、車回して」

「はい」

駐車場へ行って車をホテルの地下駐車場へ回す。

夜なのにサングラスをかけた彼が出入り口から出て来た。素早く後部座席に乗り込んだ。

「運転代わるよ」

久しぶりに聞いた彼の声に聞こえた。昨日も一昨日もテレビから流れる声を聞いていたし、今日もずっといっしょにいたのに、同じ人のように思えなかった。

「弥生？」

「だ、大丈夫。疲れてるでしょ？ゆつくり休んで」

「弥生」

呼ばれる声にドキツとする。低音が心に響く。

ふつと髪に何かが触れる感じがした。

「弥生」

耳元で囁かれた。

「やめて。事故起こしそうだわ」

「荷物は？」

「もう預けてある」

「着替えは？」

「してきた」

「弥生さえいれば、何もいらない」

高速の入口が見えてきた。

「運転代わるよ。寄せて」

「大丈夫」

「ほんとに？」

「何もしないでいてくれたら」

「我慢できないな」

そう言ったとたんに耳を舐め始めた。

「だ、だめ！」

「我慢できる？」

遊んでるでしょ！私で遊ばないで！右耳を翻弄する。

「弥生」

「弥生」

と名前を呼び続ける。耳の後ろから首筋、うなじへ唇を這わせ、舐めたり、咬んだり、吸いついたり、首都高速は混雑していてスピードがでてないけど、ぼーとしそうになる頭を振りながら正気を保つ。

「危ないから、やめて」

何度言っても聞いてくれない。

「前の車にぶつけるわよ！」

「ふふ」

と笑って

「感じてる？」

と言う。

一度離れ、彼の両手が私の座るシートの背面、真後ろからハンドルをもつ私の腕の下から出てきて、両脇から胸の上に置かれた。

「ちよつと！やめて！」

服の上からシートごと抱きしめて、胸を揉みだす。

「や、やめて」

服と下着の中にある小さな粒を掴まえる。

「チェリー見つけた」

「ちよつと！」

襟のボタンを器用にはずし、手を差し込んでブラの中の小さなチェリーを直接を掴んだ。

「あつ……」

「耐えられる？」

今度はウエストに手を回し、服をずり上げ、両手をもぞもぞとお腹から胸に触りだす。ブラを押し上げ、両手で小さなチェリーを指の間に挟んだまま手のひらで胸を揉みしだく。

「もう！ダメだってば！」

「お願い、お願いだからやめて」

「道の端に停めて」

このまま走ったらほんとに事故しそう。車を止めると

「助手席に移動して」

と言って、後部座席のドアを開け、運転席に素早く移った。私は車から降りず、そのまま助手席に移動した。

「最初から運転代われればよかったのに」

そう言うのを走らせた。

でもその右手は私の手を取り、指を絡ませて、手の甲にキスをして

指を一本一本くわえて舐める。指先に彼の舌の感触が残り、いやらしさを増殖する。

そのうち私の太腿の上に手を置くと、スカートをずるずるとずり上げ、太腿に直接触る。膝の裏から内股をなぞり、中心に向かう。下着の上の指先で中心をなぞる。

「君のアプリコットから蜜が溢れ出てる」

下着の端をなぞり、指先でスツと入り込むと、

「あん…」

と声がでた。

指を引き抜くと、そのまま口に持っていていき舐めて、

「甘い」

と言う。

ホテルに到着する頃には私は骨抜きになってしまっていた。同じホテルに泊まったのに、以前と今ではぜんぜん違う。今は、私と一緒にすることがバレたらやばいと思う。いっしょにいて、フロントに行つてスイートにいっしょに泊まるなんて、ばれちゃいけないって。だから

「遅れて行くから、先に行つて」

と言うと

「だめ。いっしょに」

と手を引かれてホテルに入る。

「ここで待つて」

とロビーの椅子に座らされる。体は火照ったまま、力が入らない。

彼がフロントに行き、チェックインをしている。

「おいで」

そう言われて、差しのべられた手をとる。握り返され、指を絡ませる。エレベーターでロイヤルスイートへ。エレベーターの中でも熱烈なキスをして、部屋の扉を開け私を先に通すとすぐに抱きしめられ、向かい合つて熱い熱い抱擁をはじめた。長い長い夜のはじまり

だ
っ
た。

I LOVE YOU

京都の夜より激しかった。京都では、こんな風にならなかった。2日間逢えなかった時間があつたせい、2人とも求めあつた。京都では恥ずかしさもあつて、彼の求めに応じたただだった。昨日は、私からも彼を求めた。彼を欲してしまった。もう、この国からいなくなってしまうことが分かっていた。日本にいれば、また出会えるでももう彼は帰ってしまう。もう会えない。そんな切ない気持ちもまためて彼にぶつけた。今だけでもいい。

「すきって言つて」

「愛してるって言つて」

何度そう彼に願つただろう。彼はすべての私の要求に応えてくれた。泣きながら

「行かないで」

そう言つた私に、困つた顔で

「すぐ逢いに来る」

と優しく抱きしめた。

朝、目が覚めると、彼の腕の中に守られているように眠っていた。

このままこの世界が続けばいいと思つた。離れたくなかつた。気がついて目を開けた彼が、笑顔で抱きしめて瞼にキスをした。

「まだこのまま…」

私も彼の背中にまわした手をギュッと力を入れ、

「うん」

と言つた。でも頭は覚醒していく。

現実。無情にも時間はどんどん進み、準備をして行かなくちゃ。

もう泣かない。笑つて彼を見送ろうと思つた。

チェックアウトして車に乗り込む。彼が最初からドライバーだ。直

接成田空港へ向かう。彼らのプライベートジェットが飛ぶ。そのままヨーロッパへ映画のキャンペーンで回るのだ。

VIPルームに加賀美社長、棚橋さんも来ている。合流して、出発ロビーへ入っていく彼らを見送る。

「弥生」

ジョンに呼ばれた。

「また来る。逢いに来るから。必ず」

うんうんと頷く。涙が溢れるから、言葉が出ない。

「弥生」

抱きしめられる。もう周りにだれがいようと関係ない。彼しか見えなかった。耳元で

「I LOVE YOU」

と言った。

「Me too」

それがやっと出た言葉だった。溢れ出る涙はこらえられなかった。キスをした。いつまでも離れられない私に加賀美社長が

「三橋」

と呼んだ。

歩きだす彼を見れなかった。加賀美社長に抱きついていていた。

「大丈夫。任せて」

社長がジョンに言っていた。

顔を上げると立ち去っていく彼の後ろ姿が見えた。

1週間後、会社に国際荷物が届いた。送り主はジョン・ナービス。

「何かしらね？」

社長が開けてみると、アプリコットジャムの詰め合わせだった。

それから数日ごとに荷物が届く。イギリス、オランダ、ドイツ、フランス、スペイン、デンマーク…各国から。そのどれもがアプリ

コットの入ったクッキーやチョコレート、パイ、タルト、お酒、ド
ライフルーツ、オイルや香水もあった。

「なんでアプリコットばかりなの？」

みんなの痛い視線を受けて

「私が大好きなフルーツだと言ったからです」

と答えたけど。なんてことしてくれんのよ！

「喜んでくれてる？」

「たぶんね」

そう答えるしかないじゃない。

「I LOVE YOU」

「Me too」

Fin

I believe you

インターネットの芸能情報を駆け抜けた話題。

「人気俳優、ジョン・ナービス（34）が女優パメラ・フュー（26）との熱愛発覚。23日夜ニューヨーク郊外のレストランを出る2人をパパラッチされた。2人は2年前の映画で共演しており、ジョンの関係者の話では、彼は彼女と結婚を考えているとの情報もある」

1日1回必ずメールを送ってくる。たまに電話をかけてくることもある。昨日のメールでは友人と食事に行くとは書いてあった。あったけど。

ほうほうほう。そういうことね。やっぱり。あんな男の口車に乗せられた私が悪いのよ。

短いメールのやり取り。

「何か言うことがあるんじゃないの？」

「信じてないの？」

「どう信じればいいのか？」

「何も言い訳するようなことしてない」

「がんこものだ。謝ることもしないって。なんだかわたし一人踊らされてバカみたいじゃない！」

この後から毎日続いたメールもこなくなり、電話もかかってこなかった。私から折れるのも悔しくて、メールも電話もしないで、きつとこうやって自然消滅していくんだわ。遠距離恋愛なんて、続かないんだ。

「ハリウッド女優パメラ・フュー（26）、スタイリストのヴィヴィット・アンダーソン（30）と電撃結婚！」

今朝の話題。完全にやられた。私の負け。

こちらから謝りの電話をするなんて！なんか癪に障る。だって、話してくれればいいじゃない！言い訳してくれればいいじゃない！何にも言わないなんて！

「何か言うことがあるんじゃないの？」

メールが来た。

「ごめんなさい」

と返事を送る。

スタイリストのヴィヴィットとはモデル時代からの仕事仲間で友人だった。彼らの結婚を祝う会だったのだ。

「僕を信じて」

最後の言葉は必ず

「I LOVE YOU」

「I Believe you」

と返事した。

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2536n/>

アプリコット

2011年3月8日08時32分発行